

卒論を書くために

1

史料があつての論文

歴史の論文を書くためには、史料が必要。これは鉄則である。妄想でも創作でもなく、史料にもとづいて実証するのが論文。その実証のため根拠となるのが史料である。だから、一万二〇〇〇字を超える論文を書こうと思えば、相当量の史料が必要になるのは必定である。

卒論を書き始めるまでに、充分な量（と質）の史料を集めなければならぬ。三回生前期の演習報告で、先行研究をしっかりと読み、自分が研究しようとしている分野について、どのような史料があり、それをどう分析するかという手法を学んでいるはず。そして、後期には自分で

史料を探して、発表をしている（はず）。

史料がなければ、いくら自分が研究したいという熱意があつても、手も足も出ないということになる。例えば、武蔵坊弁慶について研究したいと思つていても、比較的確かな史料としては『吾妻鏡』に二ヶ所、義経に付き従う人の一人として出てくるだけ。これでは、「武蔵坊弁慶の実像」といったテーマだと手に負えない。後世の伝承や『義経記』などの軍記物語を史料として、武蔵坊弁慶像（イメージ）の展開を追跡することは可能かもしれないが、この場合は歴史学に加えて国文学や民俗学の研究手法も学ばないといけないから、軽い気持ちで手を出すと大げがをすることになる。

まずは、先行研究を手がかりにして、これま

で知られている史料を自分で原典にあたつて確認をしていく。先行研究の注を見て、どのような本に載っているかを確かめたら、自分で図書館に行つて、その部分を探してコピーをしておく。これをしないうで、論文に引用されている史料を、そのまま引き写しすることを「孫引き」といつて、そういうことをしていると、お目玉をくらうことになる。先行研究で引用している部分以外にも重要な記述があるかもしれないし、もしかしたら研究者が自分に都合の良いところだけを引用しているのかもしれない。前後関係がわかれば、そこに書かれている意味が違ってくるかもしれない。

こうした作業に加えて、各種データベースなどを上手に使うこと。ただし、データベースはあくまでも手がかり。東京大学史料編纂所などのデータベース上では『大日本史料』などの本文が見られるようになっていゝるものもあるが、一

般的にいえばデータベースは索引にすぎない。図書で索引だけ見て本文を見ないというのがあり得ないように、データベースを使って満足してはいけないう。データベースでデータを集めたら、図書館や場合によつたら史料所蔵機関に足を運んで原文を確認すること。例えば、石清水八幡宮・岩清水八幡宮といつた宛字が使われている場合や、伊藤博文・俊輔・春輔・春畝・滄浪閣主人：といつた別名・通称が使われる場合など、データベースでは全部がひつかからないような場合もあるから、データベースですべて見たつもりになつていたら足をすくわれることになる。

デジタルに依存しすぎると却つて見落としがちなのが、索引や辞典といつたアナログな文献。図書館には、いろいろと専門的なテーマに特化した辞書や索引があるので、事典類も確認をしておくこと。

ここまでは、あくまでも基礎作業。これに加えて、自分が求める史料を探して片っ端から史料をめくる作業が必要になる。新聞や自治体史、史料集：それぞれのテーマで格闘するべき史料は色々だが、これをしてないと新しい史料を見つけることは出来ない。先行研究で使われている史料だけでは、よほど新しい史料の読みをするか、従来の史料読解の間違いを見つけなければ、なかなか先行研究を超えることは難しい。

たった一行の史料を見つげるために何日も図書館に籠もったり、あるいは膨大な史料の山から何百枚ものコピーをしたり。この膨大な史料をめくる（読むのではなく、ひたすらキーワードを探してめくる）作業を「地獄めぐり」という人もいる……。この作業では、関係ありそうだと思う史料は、ちよつと関係なさそうでも一応コピーしておくことが鉄則。後になって、「そうそう、あれどこにあったっけ」となっても、

再び巡り会える可能性は低い。一期一会だと思つて、しっかり情報を集めておくこと。コピーするときには、どの本の何頁からとつたかもメモすることを忘れずに。論文執筆が大詰めになった頃に、典拠不明のコピーを前に、再び史料の山をひっくり返すのは大いなる時間の無駄である。

こうして集めた史料。苦労したのだから全部使いたい……というのは人情だが、それはやめておこう。次に行くべきは史料の吟味である。いつ、誰によって、何のために、どういう立場で書かれた史料か。訴訟史料などは、自分に都合の悪いことは書いてない。後世の編纂物か、同時代史料か。年代不明のものなどは、年代の割り出しから。内容や登場人物などから、年代を割り出すことになる。この編は先行研究も参考にするといいが、間違っている場合もあるの
で注意。

そして史料をしつかり「読む」こと。史料読解は史料購読で二年間、(ちゃんと授業を聞いてれば)きっちり身につけているはず。和風漢文の史料などは、字面を追いかけるだけでも何となく内容はわかるかもしれないが、自分で読み下しにできるだろうか。読み下せない場合は、解読が間違っているのかもしれないし、内容がきちんとしていないのかもしれない。

その上で、史料を読みながらノートをとること。いつ、誰が、何をしたか。小説ではないんだから、眺めているだけでは簡単に内容は頭には入ってこない。それを読み流して、内容をしっかりと理解できるようになら、りっぱなプロの研究者。普通は、そう簡単にはいかないから、ノートやカード、パソコンを手元に置いて、史料に書かれているポイントをまとめておくことになる。

史料を整理する

こうして、ある程度の情報が集まってきたら、史料を整理しよう。雑多な史料がごちゃごちゃになっているだけでは、混乱するだけである。年表をつくったり、必要に応じて地図にマッピングをしたり、内容別に分類をする。登場人物がややこしい場合は家系図や組織図を作成する。特に年表づくりはオススメの作業。前後関係から思いがけない出来事が結びついたり、画期となるできごとが明確になったりする。歴史学は時系列でモノを考えるものなので、こうすると変遷や因果関係などが見てくるので、論文のアイデアが浮かぶことも多い。

マッピングは空間的な整理、分類は内容によるグルーピング。とにかく沢山の史料を時間なり、空間なり、内容なりで秩序が付けられいくと頭のなかが次第に整理されていく。

こうした作業を経ると、ただの紙の束だったものが、論文を書くための貴重な財産になってくる。時間経過による歴史の変遷、地域差、あるいは集団の組織や意志決定のプロセスなどなど……。史料からどんなことが言えそうかが見えてくれば、その線にそって足りない部分を補っていけばいい。

歴史的な変化をいうのであれば、画期がいつで、どの理由は何かに注目して、どの画期にあたりそうな時期の史料を集中的に探していけばいい。地域差の場合は、ちよつとした工夫が必要。よく、「比較をしたい」という声を聞くことがあるが、目的意識のない比較は何の意味もない。「ここが違っていて、ここが同じでした」といった、だからなに？という結論になる。目的意識を持った比較というのは、何かを明らかにするための戦略的な比較——ということである。都市と農村の違い、幕領と藩領の違い……など、

比較をすることで何を浮かび上がるのか——つまり、相違点が何によって生じているかを効果的に明らかにすることを目指して、それにもっとも相応しい対象を選択すること。この辺は地域差の背後に何があるかを見抜かないと「違っていました」で終わってしまう。目的が決まれば、相応しい比較対象をよく検討すること。

マッピングで全体的な傾向が浮かび上がったときも、その次はその傾向が何故生じたかを考える。「全体」を具体的に論じるのは難しいので、顕著な事例をいくつか選んで、そこから一般化するのでもいいかもしれない。

論文でどんなことを書くかが決まってくれば、その後は使う史料の選定。集めた史料を全部使う必要はない。いいたいこと、論じたいことに必要な史料を的確に選ぶこと。余計な文章を入れなくても、史料を並べれば自然にひとつの結論につながっていくのが理想（これは柳田

国男が言っていた。何に書いてたが忘れたけど。それが難しいので、あれこれと文章で説明をしていくことにはなるんだけど。

よくレポートや卒論で、「なお、これは余談だが……」といった豆知識が挿入されることがあるが、これは不要。こんなことも知ってるぞ〜という安い知識の披露は、却って薄っぺらさが際立つのでやめよう。

……ということを考えていくと、論文を書くためには相当の史料を集めて、そこから使える史料を吟味して、史料を積み上げて飛躍・破綻なく実証することが要求されるわけだから、まずは膨大な量の史料を集めておかないと話にならないということがわかっていただけだろうか。少なくとも、読み手を納得させられるだけの情報を積み上げないと、自分の「思い」だけでは相手は納得しない。もしも、史料が問題の性格上、限定されているというのであれば、その限

られた史料を、それこそもう徹底的に読み込んで分析しないとお話にならない。

卒論には、それなりの準備が必要だから、提出締切間際に何の材料もなかったら、これはもうどうしようもないし、助けようもないということになる。締切まで「面倒だから」「大変そうだから」と先送りして、ず〜っと何もしないで、直前になって慌てても材料がなければどうすることもできない。

もし、いま手元に史料がほとんどないとか、ちよつとしかないという場合は、今から必死になつて史料を集めなければ、どうしようもないことになる。

史料とは食材

史料というのは、料理を作るための食材のよなものである。カレーライスを作るためには、

ジャガイモ・ニンジン・タマネギ・豚肉か牛肉、そしてカレー粉、もちろん米も必要。いくらカレーを作りたい！といったところで、カレー粉がないなら、カレー粉を手に入れる努力をしなさいといけないし、どうしても手に入らなければ、シチューか肉ジャガに変更することも考えないといけない。

史料とは、論文を書くための材料、料理をつくるうえでの食材である。つまり、史料がなければ、論文は書けないし、いくら自分がこうしたい！と思っても、相応しい史料が見つからない場合は、方向転換も必要になる。

そして、先行研究は調理のための参考にはなる。とても参考になるが、先行研究は史料ではないのだ。あくまでも、料理にとつての材料ではなく、いわばレシピ本にすぎない。

こうした美味しい料理がつくれましたとか、私はこうした料理を作りました、ということ

教えてくれるもの。これがなければ、最初から手探りで試行錯誤しなければならぬから、とてもありがたい。しかし、レシピ本は食べものではない。

先行研究をもとにして、みなさん自身が材料を集め、吟味して、食べるモノを作らないといけない。それは、レシピ本をいくら読んでも、料理が上達するわけではないから、ある程度まで勉強したら、自分で史料を読んで、自分の頭で考えなければならぬ。

いくら『クッキングパパ』を全巻読破したからといって、それでうまい料理がつけられるとは限らないのだ。ヘタでも、自分でやってみないと。

間違えてはいけないのは、教員の仕事は「料理」の仕方のアドバイスであって、メニューを考えることでも食材を用意してお膳立てすることでもない。論文ありませんか！？、史料を教

えて下さい！ クレクレくん、クレクレさんが毎年いっぱいいるが、テーマを見つけるのも史料を探すのも、先行研究を探すのも、みなさんの仕事である。

教員は、危なっかしい手つきをしていたら、「そんな包丁の持ち方をしてたら怪我するよ」というだろう。タマネギは焦げ付きやすいから、炒めるときは弱火でね、といった経験に基づくアドバイスもする。そこその料理がつくれそうなら、チョコレートをひとかけらいれると美味しいらしいよ、といった助言もするかもしれない（この辺は、相手の様子を見て）。「こういうことで困ってます」といった相談なら、力になれるかもしれない。しかし、「どうしたらいいかわからないんです」とか、「何も手に付かないんです」では、助けようがない。代わりに料理をしてもらおう（論文を書くのを助けてもらおう）、といった甘い考えを持っているのだったら、そ

れは速やかに捨てるべきである。

史料Ⅱ食材が集まったら、うまい料理をつくるためには素材の吟味が必要。足りなければ、不足を補わなければいけない。傷んだ野菜や肉は使えないし、そもそもカレーをつくるなら、どんなに高級食材だとしても鮎寿司は使えない。同じように良質な史料を吟味し、目的に沿った史料を選び、それらを適切に「料理」することで論文が仕上がることになる。そのためには、充分な素材をあらかじめ準備しておかなければならない。

初めてなので、ウマイものをというのは難しいかもしれない。でも、食べるもの（読むに堪える論文）は作ってほしい。そのためには夏休みという比較的集中が出来る時間を有効に活用し、良質な素材（史料）をできるだけたくさん集めておくこと。